

令和3年度 福井県立奥越特別支援学校 学校評価書

【担当部】 具体的な取組	項目	成果と課題	改善策・向上策
【図書研究部】 児童生徒が周囲の人や物、地域と関わりながら、それぞれの目標に向かって主体的・対話的な活動を繰り返すことを通じて、将来必要な力を培うことができる授業づくりを行う。		<p>昨年の研究テーマを継続しつつ、指導要領で示された「主体的な学び」の視点から自らの実践を省察することを通して子どもの学びを捉え直すことを目標とした。</p> <p>具体的には、これまでの「教員授業参観週間」や「外部専門家活用事業」に加え、少人数による定期的な実践の話し合い(月1回)を行い、様々な視点からの意見を交わすことで、子どもの学びの考え方やイメージを広げ、実践の改善へつなげるよう努めた。</p> <p>話し合いで、「子どもが自ら考え、判断し、表現することを重視し、その実現に向けた授業作りになっているかの再確認をしてきた。</p> <p>校内研究についてのアンケートからは多くの教員が「主体的な学びの視点を意識して授業を振り返ることができた」、「授業や子どもの学ぶ姿の再考に役立った」、「主体的な学びのイメージに変化があった」と答えた。一方で、「実践につなげられると良い」、「他学部の教員と意見を交わせると良い」、など研究体制や方向性に課題が挙げられた。</p> <p>保護者から「もっと利用できるHPを」という要望が寄せられた。</p>	<p>今年度は、少人数のグループによる話し合いを中心に授業改善を目指してきたが、各グループでの話し合いにおいて内容にばらつきが見られたようである。</p> <p>要因としては、話し合う観点が不明確であったり、フリートークという形式であったため、内容が相談会や方法論などに終始してしまい、「主体的な学び」やそれを保証する授業の在り方にまで話し合いを深めることが難しいグループができてしまったのではないかと考えられた。</p> <p>今後は、「話し合う観点の明確化」と「グループ内での共有」、実践により直結した研究になるような「グループ編成」について改善し、研究を継続したいと考える。</p>
【幼小学部】 児童生徒が周囲の人や物、地域と関わりながら、それぞれの目標に向かって主体的・対話的な活動を繰り返すことを通じて、将来必要な力を培うことができる授業づくりを行う。	教育課程・学習支援	<p>単元や題材ごとに、目標設定や支援について検討し、授業の記録や子どもの様子などをもとに話し合いしながら検討を重ねた。クラスやグループの教師で協力しながら授業づくりに取り組み、様々な場面で子どもたちが主体的に活動する姿や学び合う姿をみることができた。また、学部の日の語り合いを通じて、児童のよさや課題に気づいたり、指導の成果を実感したりすることができた。</p> <p>今年度は新型コロナ感染対策に留意しながら、宿泊学習や修学旅行を実施することができた。児童は事前学習で学んだことを生かし、落ち込んでいる活動に取り組むことができた。また、交流および共同学習においては、今年度は間接的な形ではあるが居住地校交流を行うことができた。授業で作った作品や活動の写真などをやり取りし、お互いの様子を伝えあった。また遠隔システムを利用し、相手校の児童と自己紹介をしたり、授業で取り組んでいたことや修学旅行について話をしたりすることができた。</p>	<p>児童が集団の中でより深く学び合うことを目指し、児童同士が一緒に活動したり、やり取りをしたりする場面をより多く設定していく。集団の中で自分の役割を果たすこと、それぞれの役割を通して互いにやり取りをすることで、相手の存在を意識したり、学び合う楽しさに気づくことができるような授業づくりを進めたい。</p> <p>今年度は学部の日に、担当している児童や授業について小集団で語り合うことができた。来年度以降も、児童の姿や学びについて自由に語り合い、成果や課題についてじっくり考えるために、教師同士が十分に語り合うことができる時間と場を確保することが必要だと考える。</p>
【中学部】 児童生徒が周囲の人や物、地域と関わりながら、それぞれの目標に向かって主体的・対話的な活動を繰り返すことを通じて、将来必要な力を培うことができる授業づくりを行う。		<p>今年度は生徒数が増え、様々な学習や学部行事においてクラスを解いたグループ活動を多く取り入れ、友達と協同して学習する場面の充実を図った。生徒がより主体的に活動できるように、生徒の意見や希望をもとに学習を進めたり、話し合い活動や役割活動を積極的に取り入れたりした。修学旅行や校外学習の行程決めや学期末の学部集会「がんばった会」の運営などで特に活かされた。</p> <p>新型コロナ感染対策に留意しながら交流学習にも積極的に取り組んだ。居住地校交流や学校間交流では、手紙やビデオレターを活用したり、遠隔通信で発表や感想のやり取りをしたりするなど新しい試みで実施した。特に遠隔通信では、より相手のことを知ろうと丁寧に見たり聞いたり伝えたりする様子が多く見られた。また、人前に出るのが苦手な生徒も、自信をもって表現しようとする様子も見られ新しい学習の在り方としての成果を得た。その他、農業体験や販売活動では地域の方と直接触れ合い、生の声を受ける喜びを実感することもできた。地域社会と繋がり多様な評価を得られることは、生徒達にとって大きなやる気や自信となることを改めて感じ、そうした機会を今後も積極的に設けていきたい。</p>	<p>生徒が「主体的に活動する」ことの目的や意義をそれぞれの担当授業で実践し話し合ってきた。染め物の作業学習では、お客様に商品アンケートをとって自分の商品作成に活かすという新たな活動に取り組んだ。そこではお客様の喜ぶ顔をイメージしながら目的意識を高めて取り組む生徒の様子が見られた。作業など特に長年の活動はマンネリ化しがちだが、時に生徒の意見に委ねる柔軟な発想で、主体的な学びに向けた授業作りの実践をさらに積み重ねていけるとい。</p> <p>今年度は、新型コロナの感染状況に応じてやり方を工夫しながら、行事活動や交流学習等を進めることができた。特に遠隔通信を活用した交流学習では、最初、生徒らにとってはイメージがつきにくく分かりづらいのではないかと思われたが、直接交流とは違ったよさも見られ新たな発見であった。来年度も引き続き、新しい発想で地域社会と繋がる場を求めていきたい。</p> <p>来年度はさらに生徒数が増え、そのニーズや特性も今以上に多様となる。今年度行ってきた協同して学習する場面の充実を継続していくとともに、個々の特性やニーズに応じた学習内容や支援環境の整備を丁寧に行っていきたい。</p>
【高等部】 児童生徒が周囲の人や物、地域と関わりながら、それぞれの目標に向かって主体的・対話的な活動を繰り返すことを通じて、将来必要な力を培うことができる授業づくりを行う。		<p>今年度は、10月以降、新型コロナウイルスの感染状況が落ち着いてきた中で、これまで控えていた調理実習や食品加工、販売活動、校外学習や宿泊学習などを実施することができた。実施にあたっては、新しい生活様式を継続しながら、生徒が「こんなことをしたい」「こんなふうにしたい」と主体的に考えて計画し学習を進めることで、集団参加や集団活動が苦手な生徒も含めて、意欲的に充実した活動を行うことができた。徐々に協同学習や地域交流を再開することができ、特に地域の人たちとの交流学習は、生徒たちに真剣な眼差しとたくさんの笑顔をもたらしていた。真剣な体験や達成感のある体験が次の主体的な学びへのステップにつながっていく様子が見られた。今後も、集団参加や集団活動が苦手な生徒には個別に配慮しながら、生徒の思いを大事にした主体的な学習活動を行っていきたい。</p> <p>また、生徒一人一人の自立と社会参加に目を向け、生徒個々に身に付けさせたい資質や能力と生徒自身の思いとの擦り合わせを丁寧に行っていくことで、主体的で対話的な学びにつながる授業づくりを進めていく必要がある。特に、病弱(精神疾患を含む)の生徒は、「自立活動」の授業を通して自己理解を促し、レジリエンス(精神的な回復力)が身に付くように、個に応じた支援をきめ細やかに行っていきたい。</p>	<p>これまで縮小や延期、中止を余儀なくされてきた学校行事や学部行事、地域交流等の再開は、生徒の学校生活や学習活動における大きなモチベーションになっている。新型コロナウイルス感染対策に細心の注意を払いながら、可能な範囲で、学校行事や学部行事、地域交流を積極的に展開し、生徒の主体的な活動を支援し、学びの質の向上を図っていきたい。</p>

令和3年度 福井県立奥越特別支援学校 学校評価書

【担当部】具体的な取組	項目	成果と課題	改善策・向上策
【教務部】地域に開かれた学校を目指し、市街地にあることを生かした教育課程を計画し、学習活動を展開する。	教育課程・学習支援	<p>今年度はコロナ禍の中で、「新しいかたち」を模索しながらの実践となった。実施すること自体が心配された入学式や修学旅行、宿泊学習などにおいては時期を変更したり感染対策をとったりした上で、無事に開催することができた。学校評価アンケートにおいて、教職員回答、保護者回答とともに、昨年度数値より「A」の数値が高く、今年度は、教職員、保護者とともに、改善できた実感があったと思われる。</p> <p>遠隔機器を利用しての活動も増えた。特に、居住地交流や学校間交流では、相手校とつなぎ、自己紹介や作品発表、写真やビデオレターなどでやり取りするなど新しい試みでの実施となった。お互いの様子を伝え合い交流する場面を設定することができた。</p> <p>地域の方を招いての販売活動などは難しい状況であったが、保護者を活動協力者として予め数名募り、生徒の販売活動の支援をしていただく形での活動を行うことができた。会場も、児童生徒玄関前に限定し一方向にお客様を誘導するなど、工夫をこらしての活動となった。</p>	<p>高等部、小学部、中学部の県内に修学旅行では、(高:5月、小:10月、中11月)。地域の文化や産業、伝統工芸、豊かな自然などに触れ、改めて福井県や地域のよさを見つめ直す機会となり、今後も地域のよさを実感できる活動を実施できるとよい。</p> <p>幼児児童生徒にとって、クラス以外の子や他校の子とやりとりする場面、地域の方とふれ合う場面は、コミュニケーション面等の成長を促す上で大変有効である。「地域が教室」を改めて捉え直し、実施時期の検討や学習活動内容の検討、遠隔機器を使ったやり方などの工夫をしながらも、実施自体を継続していくことが大事だと考える。</p> <p>コロナ禍の中でも少ない機会を有効に活用し、新しい形を模索しながら、地域貢献や地域に開かれた学校づくりを目指していきたい。また、それらを積極的にホームページや通信などで保護者に情報発信していきたい。次年度の10周年記念事業のなかでも本校の取り組みを地域に発信したいと考えている。</p>
【涉外部】保護者研修や親交を深めるPTA活動の充実を図る。	保護者支援	<p>進路支援部との共催で7月に「進路学習会」と「企業・事業所見学会」を実施した。また、12月に相談支援部との共催で実施した「家族について語る会」に併せ、「きょうだい」をテーマにしたDVD「ふたり～あなたという光」の上映会を実施した。研修交流委員会を中心に参加を呼び掛け、進路学習会には21名、企業・事業所見学会には17名、家族について語る会には9名の参加があった。</p> <p>進路支援部と協議しながら、企業・事業所の見学先や日程を検討し、さらに多くの保護者の方々に参加していただけるよう計画していく必要がある。</p> <p>学習の成果や学校での様子を発表する機会が制限されるなか、広報誌を通じて周知することができた。</p>	<p>「進路学習会」は、小学部・中学部・高等部とも1年生の保護者の参加が多かった。進路に対する関心の現れであるとされる。興味関心の高い事項をアンケートを取るなどして的確に把握し、学習会の内容等を進路支援部と検討していきたい。</p> <p>「企業・事業所見学会」は、見学先が既知の企業や事業所であることから、高等部保護者の参加者が少なかった。進路学習会との合同開催などを含め、実施の形態について進路支援部と検討していきたい。</p> <p>「家族について語る会」については、周知の方法や機会を検討し、保護者の参加者数増加に繋げていきたい。</p>
【生徒指導部】学校生活において、自主的・主体的な行動ができるように活動内容の充実を図る。	生徒支援	<p>昨年度に引き続き、新しい生活様式の中で学校行事を行った。人との間隔を広くとったり、会場を分散したり開催時間帯をずらしたり等、3密を避ける工夫をして実施した。全校集会ではステージ上の発表が増え、学校祭では保護者の来校人数を一家族当たり2名とし、参観できる人数を増やして開催できたこともあり、昨年度より保護者の満足度指標が向上したと考えられる。来年度は今年度以上に保護者に学習発表の場を見ていただけるように検討していきたい。</p>	<p>来年度も制限のある中で、学校行事を開催することになると思われるが、感染状況を見ながら、参観できる保護者の数を検討したい。また、来年度は開校10周年を迎えるので、そのような節目の年を学習の絶好の機会であると捉え、おくえつ学校祭で幼児児童生徒がより自主的・主体的に活動できるよう内容を検討していきたい。</p>
【保健指導部】安心・安全な学校を目指し、保護者とともに取り組みをすすめる。	安全管理	<p>地震が起きたことを想定し、起きた時から保護者に引き渡すまでの教職員の動きのプロセスを事前に確認しながら、全校で引渡し訓練を行った。流れの確認は概ねできたが、その場での判断が必要なところや細かなどころでの改善が必要なところもあった。今回の反省事項を見直してマニュアルの整備に役立てたい。</p>	<p>教職員については、引渡しマニュアルを年度初めに確認してもらう。保護者については、引渡し方法を理解してもらえるよう、紙面で伝えたり、PTA総会で概略を説明する。次年度は、災害時により近い形での訓練を計画し実施していきたい。教員は本部を立ち上げるところを迅速に行い、保護者はメールを確認し学校へ迎えにくる訓練を実施できるよう計画していきたい。</p>
【相談支援部】校内における取組を共生社会の実現に向けた地域支援につなげる。	校内・地域支援	<p>校内支援においては、中学校の教育相談内容と高等部入学に関する行事で得た情報を一つのシートにまとめて円滑な移行支援に努めた。また、迅速な対応が必要なケースに対し、各学部の特別支援教育コーディネーターを中心に現状の把握と支援の在り方について、校内ならびに関係機関と連携して対応した。今後は、より細やかに対応するためには有効な校内支援体制の検討が必要であると考える。</p> <p>地域支援においては教育相談対象地区(奥越、上志比)小中学校へのアンケート結果から「身近に相談できる」機関として定着してきたことが伺える。教材教具、ICT機器の利用の仕方の紹介、進路相談、アセスメント、移行支援についても「専門的な」教育相談機関として評価された。一方より定期的な巡回相談を望む理由から、教育相談の時間や人員増を要望する意見も見られた。今後も定期的な巡回相談等が継続できるよう相談支援部内での情報の共有を図っていきたい。</p>	<p>校内支援については支援会議の開催時期や、どのような時に誰が対応するとよいのかなどの具体的なシステム作りの検討をしていきたい。地域支援については、今後も福井県特別支援教育センターと連携し、奥越、永平寺町上志比地区の小中学校、高等学校における特別支援学級、通級における担当者のニーズを把握し、必要な情報を提供できるよう、引き続き相談支援部会、コーディネーター会において情報の共有や支援について検討を重ねていきたい。また地域の特別支援教育のセンター的機能を発揮するためにも、特別支援教育コーディネーターだけではなく、本校職員の専門性を活用するなど学校全体として引き続き取り組んでいけるよう努めていく。</p>
【進路指導部】一人一人の個性やニーズに応じた進路先を共に考え、進路希望の実現を図る。	進路支援	<p>職場見学や産業現場等における実習を通して保護者や本人と情報交換を行い、一人一人に応じた支援を行うことができた。</p> <p>課題としては就労継続支援A型・B型を希望しても、定員の関係で利用することができない状況がある。</p>	<p>引き続き職場見学や産業現場等における実習を通して情報交換を行い、一人一人に応じた支援を行っていきたい。</p> <p>3年生の実習については、6月・11月の実習だけでなく、状況によっては夏季休業中や3学期にも実習を計画していく必要があると考える。</p>